様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２７５３

研究課題名（和文）清末民国初期成立の漢語白話文体に見られる歐化語法現象の実証研究

研究課題名（英文）A study on Europeanized usage of the Chinese writings vernacular found between Late Qing and the early days of the Republic of China.

研究代表者
矢放　昭文（Yahanashi, Akifumi）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・招へい研究員

研究者番号：２０１４０９７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：中国社会の近代化は阿片戦争前後の西洋との接触にはじまる。書面言語の近代化も例外ではなかった。特に英語との接触により、新しい物品だけでなく英語概念も認識され漢語化された。本研究の目的は、英語との接触過程で漢語書面言語に生じた言語事象の特徴を解明することであった。19世紀中葉成立の『華英通語』（３種）、民国初期の趙元任訳『阿麗思漫遊奇境記』を各時期の主要研究資料として据え、英語受容に伴う語音・語法面での言語事象を追求する方法を採用した。研究成果は学術論文7篇、研究発表6件（国際学会２件、招待講演１件）であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国の言語社会では長期にわたり女性・子供に人格は無く、物扱いで表記されていた。だが19世紀前半の阿片戦争時期に至り西洋文化と接触を始めた頃、例えば英語三人称女性代名詞の「she」は男性と異なる女性だけの呼称であることを一部の中国人は知った。但し知ったのは西洋との交易従事者であり、中国社会を支配していた士大夫・読書人層ではなかったため、社会に拡散はしなかった。
　約50年を経た辛亥革命後の五四期、欧米留学から帰国した知識人が主体となり白話文学運動が始まった。「she」概念を翻訳する際にも論争が起きたが、周作人・劉復・趙元任の工夫・尽力により「女也」として落ちついた。以上は研究成果の一部である。

研究成果の概要（英文）： The background of the beginning of this study. The Modernization of the Chinese Society had begun under the contact with the West around the Opium War (1839-41).The Europeanized style of written languages were no exception. These Europeanized features that were observed on the contact process with Western languages should be clarified. The purpose of this study is to analyze those features that were produced under the contact with Western languages, especially English. Those features are observable on the manuscripts published around mid 19th century in Canton, China. The other material is the Chinese version of Lewis Carroll (1832-1989)'s ‘ Alice's Adventures in Wonderland ’ which was translated by Yuen Ren Chao (1892-1982)and published in 1921, Shanghai. Participants of this study have researched the features that were induced from these materials. The results include 7 articles and 7 announcements(3 at international conference).

研究分野：中国語学

キーワード：文学言語　書面語　華英通語　歐化語法現象　三人称女性代名詞　趙元任　阿麗思漫遊奇境記　概念の継承

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）中国社会の近代化は阿片戦争（1839-41）前後に始まった西洋文化との接触を契機としている。言語、殊に書面言語も例外ではなく、この時期には接触を始めていた。接触を物語る具体的資料の一種に『華英通語』（咸豊本 1849、狩野本 1855、哈佛本 1860、福澤増訂本 1860）を挙げることができる。諸本間の異同を検討するに、狩野本以降は咸豊本を底本として加筆・訂正を重ね福澤増訂本に至ったものと推断出来る。いずれも交易を進める際に必要な会話文・単語を内容とする木版手冊本である。交易従事者の需要に応える内容を収録しているが故に、発行場所・編者は変転しつつも、版は重ねられたのであろう。「天、天球、日･･･」等の華語にそれぞれ「Heaven、Celestial sphere、sun･･･」等の英語を充当させ、更に漢字音に基づき英語音を表記する。さらにカレー（curry）、プディン（pudding）、シェリー酒（shelly）など中国社会には始めての舶来物品名称は音訳漢字で表示し、次にラテン文字表記、漢字音による英語音表記を加えるなど、体裁は統一されている。なお漢字音の母胎は、代表者の予備的調査に基づけば標準中国語ではなく粵語或いはその下位方言音であると予測される。

（2）物品だけでなく新しく伝来した語彙・概念を記すこともある。人称代詞記述部分（狩野本百十九葉）では「他 He 希又曰 him 謙」に対して「佢 she 施又曰 her 蝦 以女人而説之」と注記しており、「佢 she」は三人称女性代名詞として記された初出の漢語として見做すことができる。中国の言語社会では長期にわたり女性・子供に人格は無く、物扱いで表記されていた。だが『華英通語』の該当する記載は、英語三人称女性代名詞「佢 she」が男性とは異なり女性だけの呼称であることを、編集に携わった中国人が知っていたことを示す。知ったのはおそらく交易従事者であると推測できるが、人格まで掘り下げて理解されることはなかったと思われる。中国の精神社会形成とその持続に永い間深く携わっていた士大夫・読書人層ではなかったからである。さらには、社会的機運も伴っておらず、中国社会一般に拡散することはなかった。

（3）この概念についての理解と伝播・普及は約 60 年後の辛亥革命を経て五四期まで待たなければならなかった。欧米留学から帰国した知識人が主体となり白話文学運動が始まったのはまさにこの時期だからである。彼らの間で「she」概念を翻訳する際に、在来の伝統的価値観支持者との間で盛んな論争が行われたが、周作人（1885-1967）・劉復（1891-1934）・趙元任（1892-1982）らの工夫と奔走により「她」という字形を採用して定着に向かった。殊に趙元任は‘*Alice's Adventures in Wonderland*’、Lewis Carroll（1832-1898）原作、を漢訳し『阿麗思漫遊奇境記』として 1921 年に上海で出版した。作中で「她」字を多用することは必然であった。

以上に記したごとく、本研究開始当初の背景は「三人称女性代名詞」という英語語法に淵源をもつ人格概念が阿片戦争時期の華語書面言語に伝えられたにも関わらず、その概念表示の拡散・定着は五四白話文学運動時期まで待たなければならなかった、というところにある。（矢放昭文・関光世 2019）

２．研究の目的

（1）代表者による研究目的の一つは、「歐化語法前史」研究の一環として、19 世紀中葉以降の書面粵語文体の語学特徴と形成過程を解明することである。4 種の『華英通語』など阿片戦争前後から 19 世紀中葉にかけて成立した交易目的の英会話手冊である英粵対音資料が内包する語学特徴を追求すること、さらに清末に成立した交易目的の東南方言（客家語など）を母胎とする漢字音資料である『日本広東学習新語書』（神田外語大学図書館所蔵）をとりあげ、双方の資料に共通の交易目的という性格がもたらす語彙・語句の選択状況と表示法、さらに語法上の特徴を対比して特徴を集約すること、一連の資料を利用するにあたり克服すべき書誌上の問題点を洗い出しておくこと、などが研究を進める上で重要な作業である。

（2）併せて 19 世紀後半に成立した『正・續天路歴程土話』がもたらす書面粵語文体の語学特徴、特にテキスト上に頻度高く現出する「付加記号」の分析研究は粵語音の声調と変調を研究する上で重要な価値を持っている。この課題も研究目的とした。

（3）更に挙げるべき目的がある。上記に洗い出した問題点を慎重に扱いつつ、英粵対音資料から得られる粵語音とその下位方言の語音体系を追求し、資料毎に基礎方言を探ることである。代表者の従来の研究成果では、当該資料の一部に“脱鼻音化現象”を確認することができる。この特徴は狩野本、福澤増訂本に顕著である一方、咸豊本、哈佛本にこの特徴を認めることは難しい。この事実からどのような事情を措定することができるのか、さらに 4 種テキストの基礎方言を探る上でどのように作用するのか、これらの問題点を解決することも研究の目的に含まれる。

（4）分担者による研究の目的は、五四期以降の白話成立初期に見える「歐化語法現象」の詳細な解明である。歐化語法研究の重要性について最初に指摘したのは王力（1900-1986）であった。王力は五四期以降の漢語書面語における、西洋言語との接触に基づくと見做される新たな語法上の特徴を言語研究の視点に基づき記述した最初の学者であった。『中国現代語法』（1943）『中

国語法理論』（1944）『漢語史稿』（1958）に述べられる歐化の定義と記述は今日までの歐化語法研究の基礎となっている。

（5）但し、王力の歐化語法研究は、歐化語法研究の重要性を説くという点で先験的価値を持つが、徐志摩（1897-1931）の作品文体に見える歐化語法特徴を、語感にもとづき指摘したに過ぎず、挙例数の不十分な点、出典の偏在など客観性に疑問符のつくところを拭うことができない。

王力以降に歐化語法を研究した成果としては、顧百里『現代漢語書面語歐化語法研究』(1985)、謝耀基『現代漢語欧化語法概論』（1990）などがある。さらに 21 世紀に入ると歐化語法研究の重要性は再び確認され、賀陽『現代漢語欧化語法現象研究』(2008) 崔山佳『漢語欧化語法研究　専題研究』(2013)、など情報処理技術の向上とともに先端手法に基づく研究成果が陸続と世に問われて今日に至っている。但しこれらの研究では 100 年以上の年月に渉る言語の変遷を包括的に扱うため、一定時期の言語特徴を緻密に分析し、その特徴を際立たせるという作業の重要性を省みず、極めて大味な結果を得ているにすぎない。本研究の目的は、王力の弱点を克服し、さらには賀陽(2008)、崔山佳（2013）らの研究が達し得なかった緻密な分析と言語特徴を際立たせる、という点にある。(関光世 2018)

３．研究の方法

（1）代表者・分担者の研究の方法について、マクロに概括すると、19 世紀中葉成立の『華英通語』(3 種)、民国初期の趙元任訳『阿麗思漫遊奇境記』を各時期の主要な研究資料として据え、それぞれに補助資料を加えつつ、西洋言語受容に伴う語音・語法面での言語事象を追求する、という方法を採用した。

（2）代表者は主要資料として 4 種『華英通語』をとりあげ、その各々について基礎方言を探ることを目的として、収録語彙のデータベース化を進める。同時に個々の対音字について中古音系に基づき音類を定め、16 韻攝毎に分布状況を捉えた上で特徴を探り、その要因となる音的条件を考察すると同時に、粤語に関わる方言調査報告資料と照合したうえで基礎方言を追求した。

また補助資料として、清末の台湾で成立した、交易上の語学需要を満たすことを目的として編まれた会話手冊『日本広東学習新語書』（神田外語大学所蔵）のデータベースを活用する。該当資料は東南方言（客家語）を母胎とする漢字音資料である。本研究では作成済みの同書データベースを活用し、語彙・語文表記の特色を 4 種『華英通語』と対照し追究した。

（3）更に 19 世紀後半に成立の『正・續天路歴程土話』に認められる語学特徴、特にテキスト上に頻度高く現出する「付加記号」の分析研究を進めた。該当する語学特徴は粤語音の声調と変調を研究する上で重要な価値を持っている。この課題も研究目的である。

（4）分担者は、民国初期（20 世紀初頭）の漢語の書面語文体が示す歐化語法の様相を究めることを目的として方法を組み立てた。先ず、王力、顧百里（Cornelius C Kubler, 1985)、謝耀基（1990)、賀陽（2008)、崔山佳（2013）などの「歐化語法」研究について検討を加えつつ、広義・狭義両面から斟酌を加えたうえで、分担者独自の「歐化語法」を定義した。王力の比較的広義に捉えた「歐化の定義」を継承しつつ、変化の様相、つまり歐化語法現象の出現頻度を調査し統計上の根拠を示すことで得られる言語情報を客観的根拠として、時間軸上に配置する旧白話文との比較と、同時代の作品文体の特徴の比較を通じて、歐化語法が定着する迄の過渡期と言われている 1920 年代初頭の白話文体の特徴・様相を明らかにすることを、研究の方法として準備した。主要資料は趙元任訳『阿麗思漫遊奇境記』（1921)、原作‘*Alice's Adventures in Wonderland*’、Lewis Carroll (1832-1898)、『走到鏡子里』(1938)、原作‘*Through the Looking-Glass, and What Alice Found There*’、徐志摩（1879-1931)『瑪麗瑪麗』（1923）を採用した。

４．研究成果

（1）『華英通語』(3 種：狩野本 1855、福澤本 1860、哈佛本 1860）収録の英粤対音字が内包する音韻特徴については、代表者の「英粤對音資料與鼻冠音」(2010) においてその成果を公表した。狩野本が反映する「鼻冠音現象」は『紅毛通用雑話』(19 世紀前半成立)、『英語集全』(1862)、鄺其照 (1837-1891) 編『字典集成』(第二版 1875)等にも、各資料が独自の特徴を内包しつつも、組織的に見られることを成果とした。今回は、道光本『華英通語』(1849 年）についても同様の調査を行い、その英粤対音、特に「鼻冠音現象」についての分析を行った。その結果に基づけば、狩野本・福澤増訂本とは様相を異にしており、むしろ哈佛本（1860）の特徴に近いことを帰納した。この点は本研究の成果である。(矢放昭文 2017・2020)

（2）『日本広東学習新語書』(1899-1900) が収録する片仮名音注についてはエクセル入力によるデータベースを完成させたこと、も成果である。(矢放昭文 2019)

（3）『日本広東学習新語書』収録語句に見える「人称代詞、指示詞、方位詞」等の音注分析に基づけば、当時の台湾に通行していた客家語音の特徴であると見做す結果を得られたことが研究成果である。(矢放昭文 2021)

（4）『日本広東学習新語書』収録語彙・語句の記述上の字体については編集基準が統一されておらず、所謂「訓読」現象が頻発していること、を成果として明らかにした。一部（人称代詞複数形）の用字特徴は狩野本『華英通語』と同一であり、この点は更に掘り下げて調べる必要を認め

ている。また『華英通語』成立時期、つまり 19 世紀中葉の粵語と客家語の関係を探る必要を確認したとも研究成果の一部である。（矢放昭文 2020・2023）
（5）書面粵語文体の研究については「官話版」と「土話版」（粵語版）を対照しつつ研究を進めた。但し研究期間中には、各々第一巻のみをデータベース化し対照結果を成果としてまとめた。その後、該当資料のデータベースはアルバイト学生の協力を得て完成している。（後日公開予定。）
（6）分担者の研究成果では、賀陽（2008）、崔山佳（2013）が使わなかった趙元任訳『阿麗思漫遊奇境記』『走到鏡子里』、徐志摩『瑪麗瑪麗』を資料として取り上げ、1920 年代初頭の白話文コーパスとして使用出来ることを明らかにした。（関光世 2017・2019）
（7）三人称代詞の性別表示について、「她」への分化は 1920 年代初頭には定着していた。この点では現代漢語の雛形ができあがっていたことをしめす。
（8）『阿麗思漫遊奇境記』（趙元任訳 1921）では、女性にはほぼ間違いなく「她/她們」を使用している。「他(218):他們(149)/她(656):她們(24)/它(200):它們(37)、括弧内の数字は使用数。」また 1938 年の趙元任訳『走到鏡子里』でも同様の弁別機能をもたせて使用していることを、さらに徐志摩の文学作品『瑪麗瑪麗』（1923）からも同様の結果を得たことも研究成果である。（関光世 2018）
（9）無生物を示す「它們」、無形物を示す「它」の比較的早い時期の実例も同コーパスから得ることができる。徐志摩は「光明、勢利、愛仇、恨心･･･」などの抽象概念を「它」として表示している。これらの点も研究成果である。（関光世 2018）

＜引用文献＞

① 矢放昭文、「英粵対音資料」と二三の歐化前史現象」、京都産業大学総合学術研究所所報、第 12 巻、2017、1-13。
② 関光世、「徐志摩翻訳作品語言的歐化程度再探―以被動句為例―」、京都産業大学総合学術研究所所報、第 12 巻、2017、15-23。
③ 矢放昭文、「『日本広東学習新語書』所収仮名音注の特徴について」、神田外語大学日本研究所紀要、第 11 巻、2019、43-52。
④ 関光世、「趙元任の『ふしぎの国のアリス』翻訳とその文体　三人称代詞の性別分化をめぐって」、『翻訳通訳研究への招待』、第 20 巻、2019、1-20。
⑤ 矢放昭文、「『日本広東学習新語書』所収仮名音注の特徴について（2）」、神田外語大学日本研究所紀要、第 12 巻、2020、101-108。
⑥ 矢放昭文、「『日本広東学習新語書』の「人称詞・方位詞」について」、神田外語大学日本研究所紀要、第 13 巻、2021、85-90。
⑦ 矢放昭文、《華英通語》（狩野本）對音字的方言特色、第二十二届国際粵語方言研討會、2017 年、発表原稿。
⑧ 関光世、歐化研究の新たな試み　20 世紀初頭の漢語白話文体を知る、中国伝媒大学外国語学院講演（招待講演）、2018、講演原稿。
⑨ 矢放昭文・関光世「概念の継承と歐化語法」、第 11 回国際譯學書国際學術大会、2019、発表原稿。
⑩ 関光世、「趙元任《阿麗思漫遊奇境記》其翻訳動機和語体特徴」、中国伝媒大学人文学院招待講演、2019 年、講演原稿。
⑪ 矢放昭文、「『日本広東学習新語書』にみる訓読現象について」、第 3 会神田外語大学『日本広東学習新語書』研究会、2020 年、発表原稿。
⑫ 矢放昭文、「『日本広東学習新語書』の人称代詞複数形と訓読について」、神田外語大学日本研究所紀要、第 15 巻、2023、171-177。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 矢放昭文	４．巻 15
２．論文標題 『日本広東学習新語書』の人称代詞複数形と訓読について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 神田外語大学『日本研究所紀要』	６．最初と最後の頁 171-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 矢放昭文	４．巻 13
２．論文標題 『日本広東学習新語書』の「人称詞・方位詞」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 神田外語大学日本研究所紀要	６．最初と最後の頁 154-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 矢放昭文	４．巻 第12号
２．論文標題 「『日本広東学習新語書』所収仮名音注の特徴について（2）」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 神田外語大学『日本研究所紀要』	６．最初と最後の頁 101-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 関光世	４．巻 20
２．論文標題 「趙元任の『ふしぎの国のアリス』翻訳とその文体　三人称代詞の性別分化をめぐって」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『翻訳通訳研究への招待』	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 矢放　昭文	4．巻 11
2．論文標題 『日本広東学習新語書』所収片仮名音注の特徴について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『神田外語大学日本研究所紀要』	6．最初と最後の頁 43、52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 矢放昭文	4．巻 12
2．論文標題 「英粵対音資料」と二三の歐化前史現象	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 関　光世	4．巻 12
2．論文標題 徐志摩翻訳作品語言的歐化程度再探－以被動句為例－」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6．最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 矢放昭文・関光世
2．発表標題 「概念の継承と歐化語法」
3．学会等名 第11回国際譯學書学会国際學術大会（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 矢放昭文
２．発表標題 「『日本広東学習新語書』に見る訓読現象について」
３．学会等名 第3回神田外語大『日本広東学習新語書』研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 関光世
２．発表標題 「趙元任版『ふしぎの国のアリス』における談話標識の翻訳について」
３．学会等名 日本通訳翻訳学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 関光世
２．発表標題 「趙元任《阿麗思漫游奇境記》其翻訳動機和語体特徴」
３．学会等名 中国伝媒大学人文学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 矢放　昭文
２．発表標題 『日本広東学習新語書』所収片仮名音注の特徴について
３．学会等名 神田外語大学日本研究所主催『日本広東学習新語書研究会』
４．発表年 2018年

１．発表者名 関　光世
２．発表標題 欧化研究の新たな試み　20世紀初頭の漢語白話文体を知る
３．学会等名 中国伝媒大学外国語学院講演会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 矢放昭文
２．発表標題 《華英通語》〈狩野本〉對音字的方言特色
３．学会等名 第二十二届国際粤方言研討會（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	関　光世 (SEKI MITSUYO) (50411012)	京都産業大学・外国語学部・教授 (34304)	
研究分担者	鈴木　慎吾 (SUZUKI SHINGO) (20513360)	大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・准教授 (14401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関